

社会福祉学が展開する支援の展望

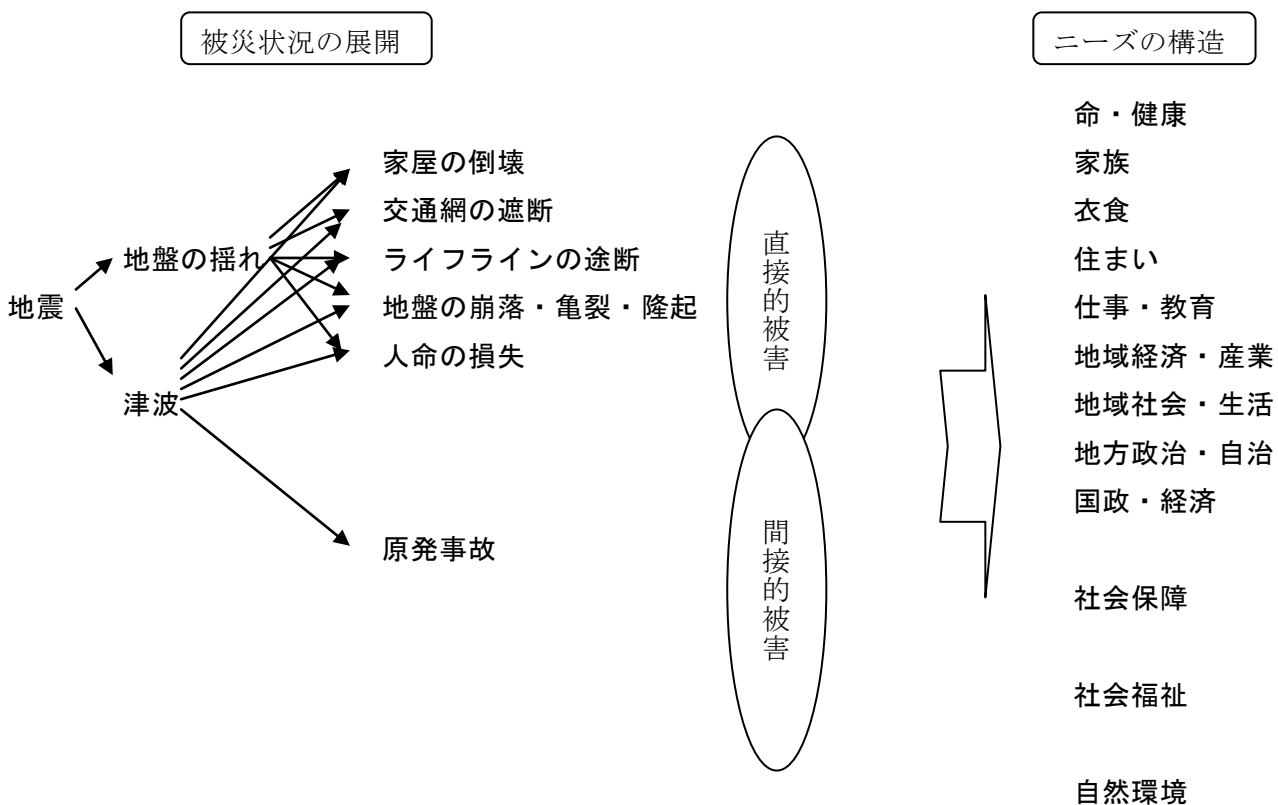
—ソーシャルワークの多様性と限界性の狭間で—

淑徳大学 稲垣美加子

I はじめに

今回の震災は多くの方たちがその命や人生を賭して残した問い掛けを、これから生きる私たちが人として、日本人として、暮らしの中にどのように意味づけていくのか熟慮することの必要性を問うているように思う。震災に起発するさまざまな生（いのち）や暮らしの課題をソーシャルワークの側面から考えるということは、まさに、今後の私たちの人（ひと）としての生き方を根本から問うことと関連するのではないだろうか。

II 被災の状況とその後のニーズの構造



3月11日に起きた東日本大震災は全ての人に共通であったが、その後続く震災に起因して発生した二次災害や生活課題は残酷なほど、地域や人によってその様相を異にする。その著しい相違が、支援を混乱させたり、人々の心の内（ウチ）に様々な棘となって、連携や共生を裂く楔となりかねない。

Ⅲ ソーシャルワークの限界性とボランティア・アクションの柔軟性をふまえて

今回の震災のなかかで多くの事例が示すように、当然、備えあれば憂いの軽減は可能である。特に、ソーシャルワークが、災害時にニーズを拡大しやすい（いわゆる「災害弱者」になりやすい）日頃から支援を必要とする人々や、高齢者や子ども、妊婦、小さな子どもを抱え子育てしている親などへの支援に、予防的介入を企図することは必要不可欠である。

しかし、時と場所を選ばない突発的な自然災害などの発生には、NPOなどのミッションに基づいた速やかな自発的活動に即応性を譲るのは、ソーシャルワークの特性からいって、やむを得ないとも言える。

Ⅳ 直接支援と間接支援による“駅伝型支援”

それでは、ソーシャルワークが担うべき、支援や役割は何か。想定外のニーズに対応しうる、いわゆるシーズについては、NPOをはじめとするボランティアな活動の多様な活動に希求すべきであろう。

そして、多様なシーズによって即応的に対応可能なニーズは、個々の資源に委ねつつ、個人のプライバシーに深く関わったり、制度・施策を活用あるいは、開発する必要性には、「ソーシャルワーカーだからこそ機能すべき場面」として力を集中すべきであろう。それとともに、いずれ撤収していく、ミッション型の活動のコーディネートへの関心を、自ら活動することと同時・並行的に展開する必要がある。

こうした災害支援へのニーズは時々刻々、長期にわたって変化を継続する。また、災害の広がりや避難する人の移動によって、エリアも広域化していく。

一人のワーカー、一つの組織ではそのニーズの多様さ、期間の長さ、あるいは、エリアの広さに寄り添うことに限界すら生じかねない。かなり長期・広域にわたる多用かつ継続的支援の可能性を鑑みた場合、支援する側にも、多くのソーシャルワーカーやソーシャルワーク組織が継続的に支援を展開していく、いわば“駅伝型支援”が必要であろう、

Ⅴ 未来に向けて

未来の子どもたちに安全・安心な暮らしを受け渡せないばかりか、未来の世代に原発被害対応と、自然環境の回復という、大きな仕事を残してしまったことを強く自戒しつつ、「人が生き・生活し・暮らしをたてる」ということを再度問い直しつつ、活動することが許される時間とエリアの中で出来る支援活動を継続していきたい。